大阪狭山市文化財報告書24

府道河内長野美原線歩道工事にともなう

狭山藩陣屋跡発掘調査概要報告書Ⅲ

2002年3月
富田林土木事務所
大阪狭山市教育委員会

大阪狭山市文化財報告書24

府道河内長野美原線歩道工事にともなう

狭山藩陣屋跡発掘調査概要報告書Ⅲ

2002年3月
富田林土木事務所
大阪狭山市教育委員会

序　文

大阪狭山市内には大阪府の史跡名勝に指定されております狭山池をはじめとして、数多くの文化財があります。大阪狭山市教育委員会では、このような文化財の保護をはかるため、市内の発掘調査を継続的に実施してまいりましたが、平成10年度からは大阪府によって施工されている府道河内長野美原線の歩道設置工事に伴いまして狭山藩陣屋跡の発掘調査を実施しております。本報告書はこの調査成果の一環をなすものです。

調査の結果、近世の陣屋の大手筋周辺の状況が徐々に明らかになってきております。本報告書がわずかでも各分野における研究の一助となれば、まさに望外の喜びです。本年度の調査におきましても、調査地周辺の皆様方には多くの協力を賜りました。厚くお礼申し上げます。また今後とも本市の文化財保護行政に対するご理解とご支援のほどをよろしくお願い申しあげます。

平成14年3月

大阪狭山市教育委員会

教育長　澤　田　宗　和

例　言

1．本書は大阪狭山市教育委員会が大阪府富田林土木事務所と委託契約を締結し、実施した府道河内長野美原線の歩道設置工事に伴う発掘調査の成果をまとめた概要報告である。

2．収録した調査は以下の通りである。

狭山藩陣屋跡　01－3区

狭山藩陣屋跡　01－5区

3．発掘調査は平成13年5月より工事の進捗に合わせて断続的に平成14年2月まで実施した。整理作業は平成14年1月から平成14年3月まで実施した。

4．発掘調査は大阪狭山市教育委員会生涯学習推進課の市川秀之が担当した。遺物の整理作業には小坪寿美子、笹岡裕里子、永橋千代子、橋本和美、扶川陽子、若宮美佐の参加を得た。報告書の執筆は市川が担当した。また遺物の撮影は阿南写真工房の阿南辰秀、伊藤慎司氏に依頼した。

本文目次

（頁）

序　文　大阪狭山市教育委員会教育長　澤田宗和
例　言
1．調査にいたる経過 …… 1
2．遺跡周辺の環境 …… 1
3．狭山藩陣屋跡01－3区 …… 6
4．狭山藩陣屋跡01－5区 …… 8
5．まとめ …… 14

挿図目次

（頁）

図1　大阪狭山市内の遺跡分布と地形分類 …… 2
図2　狭山藩陣屋跡における既存の調査箇所（S＝1/5000） …… 4
図3　調査区位置図 …… 5
図4　狭山藩陣屋跡01－3区第1面石垣立面図・土層断面図（S＝1/40） …… 6
図5　狭山藩陣屋跡01－3区第2面平面図（S＝1/40） …… 7
図6　狭山藩陣屋跡01－5区遺構平面図（1）（S＝1/80） …… 9
図7　狭山藩陣屋跡01－5区遺構平面図（2）（S＝1/80） …… 10
図8　狭山藩陣屋跡01－5区周辺の遺構（S＝1/500） …… 11
図9　「狭山藩陣屋上屋敷絵図」に描かれた上屋敷南端部の防御施設 …… 12
図10　狭山藩陣屋跡01－5区出土遺物（1） …… 13
図11　狭山藩陣屋跡01－5区出土遺物（2） …… 14

写真図版目次

図版１　狭山藩陣屋跡01－3区 ａ・調査以前 ｂ・樹木除去後（東から） ｃ・樹木除去後（南から）
図版２　狭山藩陣屋跡01－3区 ａ・石垣断面 ｂ・第２面（北から） ｃ・第２面（南から）
図版３　狭山藩陣屋跡01－5区 ａ・調査区周辺（南上空から） ｂ・調査以前 ｃ・石組出土状況
図版４　狭山藩陣屋跡01－5区 ａ・土壙１（南から） ｂ・土壙１石組 ｃ・土壙１断面
図版５　狭山藩陣屋跡01－5区 ａ・埋甕 ｂ・埋甕（直上） ｃ・埋甕（除去後）
図版６　狭山藩陣屋跡01－5区　出土遺物（１）
図版７　狭山藩陣屋跡01－5区　出土遺物（２）
図版８　狭山藩陣屋跡01－5区　出土遺物（３）

1. 調査にいたる経過

狭山藩陣屋跡は、狭山池東側の中位段丘面上に立地する近世の城館跡である。豊臣秀吉によって小田原城を落とされた戦国大名の北条氏が、近世初期にこの地に陣屋を開き、以後明治維新にいたるまで一貫して陣屋が営まれていた。陣屋は御殿が所在する北側の上屋敷と、藩主の別邸や下級藩士の邸宅が並んでいた下屋敷に分かれていた。

明治以後、廃藩置県によって狭山藩陣屋付近の景観は一変し、かつて武家屋敷が建ち並んでいた場所は大半が畑となった。その後の開発によって現在では陣屋周辺はほぼ住宅地となっている。近年では既存の住宅の立て替えや、小規模な住宅開発によって毎年わずかな面積ではあるが、狭山藩陣屋跡の発掘調査が実施されており、その成果の蓄積によって陣屋の平面構成やそこで営まれた人々の生活の具体像が明らかになりつつある。

今回、歩道設置工事が行われた府道河内長野美原線は、狭山藩陣屋上屋敷を南北に貫いていた大手筋をほぼ踏襲した道路である。その歩道設置工事に伴っては、大手筋周辺にかつて所在した邸宅の遺構・遺物に影響が生じることが予想されたため、大阪狭山市教育委員会では、工事施工者の大阪府富田林土木事務所および大阪府教育委員会と協議を進め、平成10年度より大阪狭山市教育委員会が富田林土木事務所より業務を受託する形で発掘調査を実施することとなった。平成10年度の調査では、かつての道路側溝の一部である石組や遺物が投棄された土壙などが出土し、また平成11年度にはやはり土壙や、土管暗渠、埋甕遺構などが検出されている。平成12年度は工事の進捗もあって調査は実施されなかったので、今年度の調査が３年次目の発掘調査、本報告書は３冊目の報告書ということになる。

発掘調査は、仮歩道の確保や、用地の取得などの関係で大きく２箇所にわけて実施された。本書に掲載したもののうち北側のものを狭山藩陣屋跡01－3区、南側のものを狭山藩陣屋跡01－5区と呼称している。このように飛んだ番号となっているのは大阪狭山市教育委員会では、この２調査区のほかにも、今年度にいくつかの発掘調査を実施し、それぞれに調査順で番号を付しているためである。

2. 遺跡周辺の環境

大阪狭山市内の遺跡分布および地形分類は図１のとおりである。大阪狭山市は西側の泉北丘陵と東側の羽曳野丘陵にはさまれた場所に立地するが、この両丘陵の間にいく筋かの南北方向の谷筋が走っている。これらの谷筋からは旧石器、縄文時代の打製石器がいくつか発見されている。

弥生時代の遺跡としては市域南部の高地において、弥生時代後期の集落が検出された茱萸木遺跡がわずかに知られるのみである。

古墳時代前期の遺跡についてもいまだ明らかでないことが多いが、狭山池北側の池尻遺跡で庄内期の遺構、遺物が確認されており、狭山神社遺跡でも当該期の遺物が出土している。今後沖積面での調査が進めばさらにこの時期の遺跡も増えることが予想される。

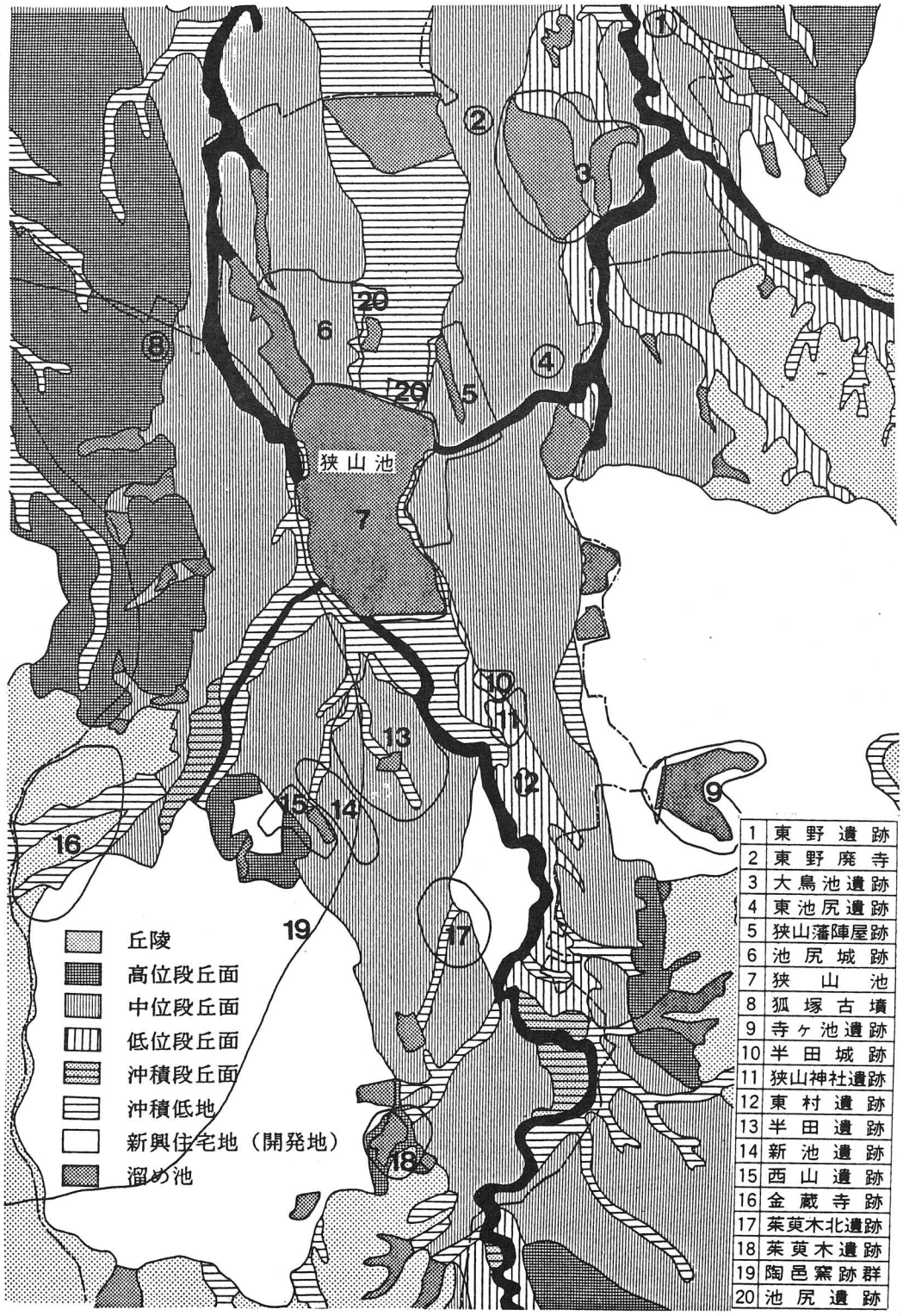


図１　大阪狭山市内の遺跡分布と地形分類

古墳時代中期に入ると、泉北丘陵を中心にその築造が展開された陶邑窯跡群が東方へと領域を拡大し、本市西端にあたる陶器山丘陵とその北側に広がる高位段丘の斜面に須恵器窯が多く築かれた。古墳時代後期の６世紀中葉から後葉になると、陶邑窯跡群はさらに東方に広がり、本市域中に広く分布している中位段丘や開析谷の斜面にも窯を築き須恵器生産が行われるようになった。７世紀代に入っても須恵器生産は継続するが、７世紀中葉からは窯の数も減少していく。

わが国最古の溜池といわれる狭山池の築造をめぐる諸問題については、長らく議論があったが、狭山池ダム化工事に伴って狭山池調査事務所が行った一連の発掘調査によって、築造年代は７世紀初頭であることが明らかになった。発掘調査では、狭山池内において中樋遺構、東樋遺構、西樋遺構、木製枠工などさまざまな遺構が次々に検出され、当地域の歴史像は豊かさを増すこととなった。

狭山池が築かれた西除川（旧天野川）に沿った大きな谷の東西に広がる中位段丘面上には、７世紀後半の寺院跡である東野廃寺、中世城館の池尻城跡、中世集落跡の庄司庵遺跡、古代から中世にかけての寺院跡である狭山神社遺跡、近世城館の狭山藩陣屋跡など、古代から近世にかけての諸遺跡が成立している。池尻城跡では1985年に大阪府教育委員会によって大規模な発掘調査が行われ、またそのほかの遺跡でも開発に伴って発掘調査が継続的に実施されている。

本報告書で主に取り上げる狭山藩陣屋跡については１９８７年以降、大阪府教育委員会や大阪狭山市教育委員会によって発掘調査が行われている。いずれも個人住宅の建築などに伴う小規模な発掘調査ではあるが、その成果を照合することによって陣屋の構造が明らかになりつつある。図２はこれまで狭山藩陣屋跡において実施された発掘調査の場所を示したものであるが、特に上屋敷では非常に多くの調査が実施されていることがわかる。これまでの調査では陣屋が建築された近世初期を遡る遺物、遺構はほとんど検出されていない。上屋敷についてはほぼ全面にわたって上下２面の遺構面が確認されており、出土遺物からみて第１面は天明２年（１７８２）の大火以後の遺構面、第２面はそれ以前の遺構面と考えられる。また平成８年度の調査では上屋敷の南端にあたる現在の東小学校正門付近では切り立った壁面をもつ東西方向堀状の遺構が存在することなどがわかっている。これらは上屋敷の南端を画する機能をもった遺構であると考えられる。遺構遺物の分布がこの堀状遺構より南では極端に少なくなることはこの推測を補強している。陣屋内で検出された個々の遺構の性格は多様であるが、遺物を多く含むのは家屋の周辺と思われる場所に掘削された土壙が中心である。おそらくは火災などの後でこのような土壙に廃品が投棄されたのであろう。遺物は日常的な生活用品が中心であるが、硯、水滴などの文房具の出土が比較的多いのは武士の生活の一端を示すものであろう。産地は肥前や堺など国内のものが中心であるがまれに外国産のものがみられる。平成13年秋にはこれらの陣屋の発掘成果を中心に、大阪狭山市立郷土資料館において特別展「狭山と畿内の陣屋を掘る」が開催されている。今後とも発掘調査を積み重ねていくことによって、陣屋の構造やその内部で営まれていた生活の具体相が明らかになっていくことと思われる。

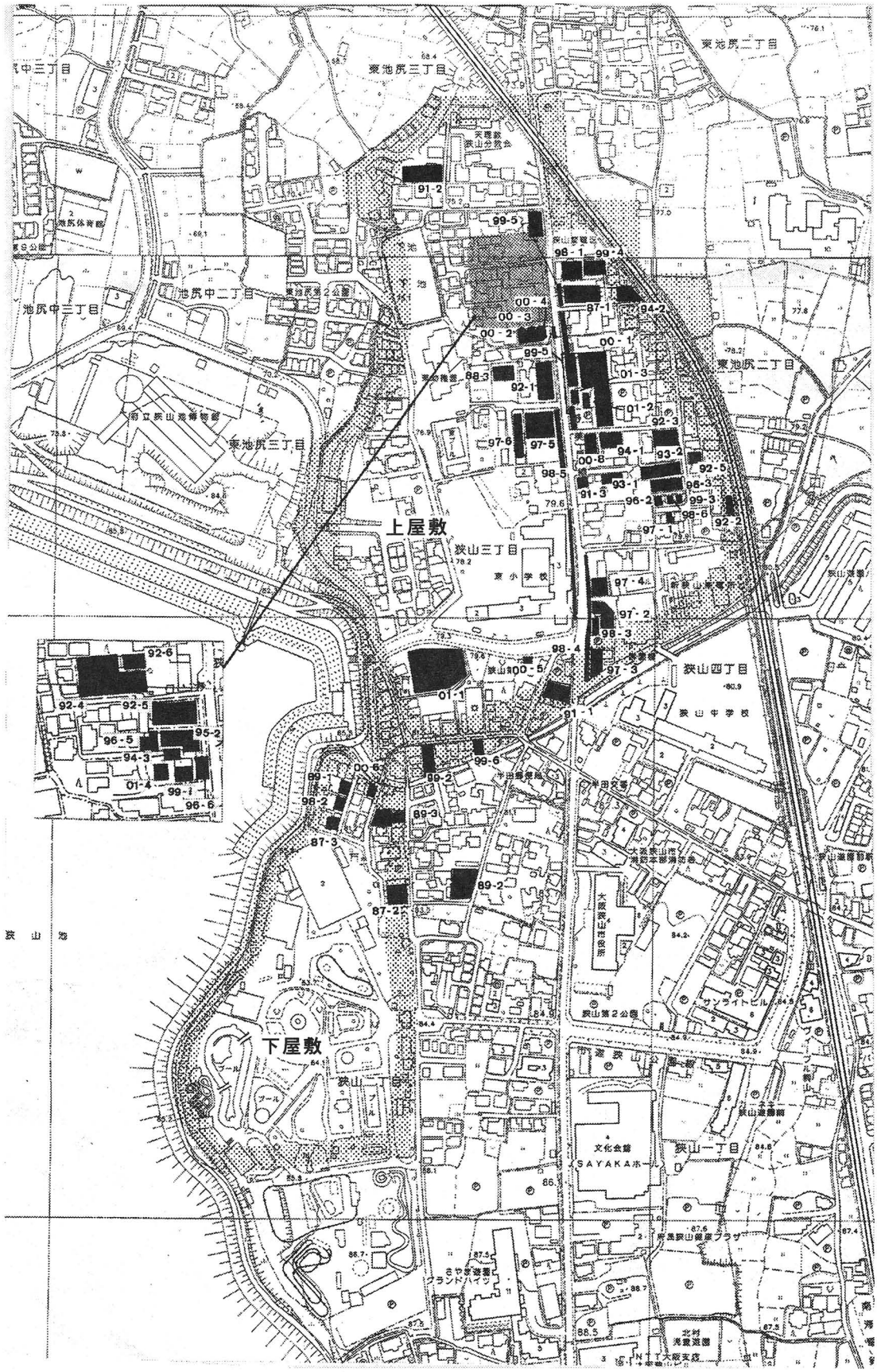


図２　狭山藩陣屋跡における既存の調査箇所（Ｓ＝1／5000）

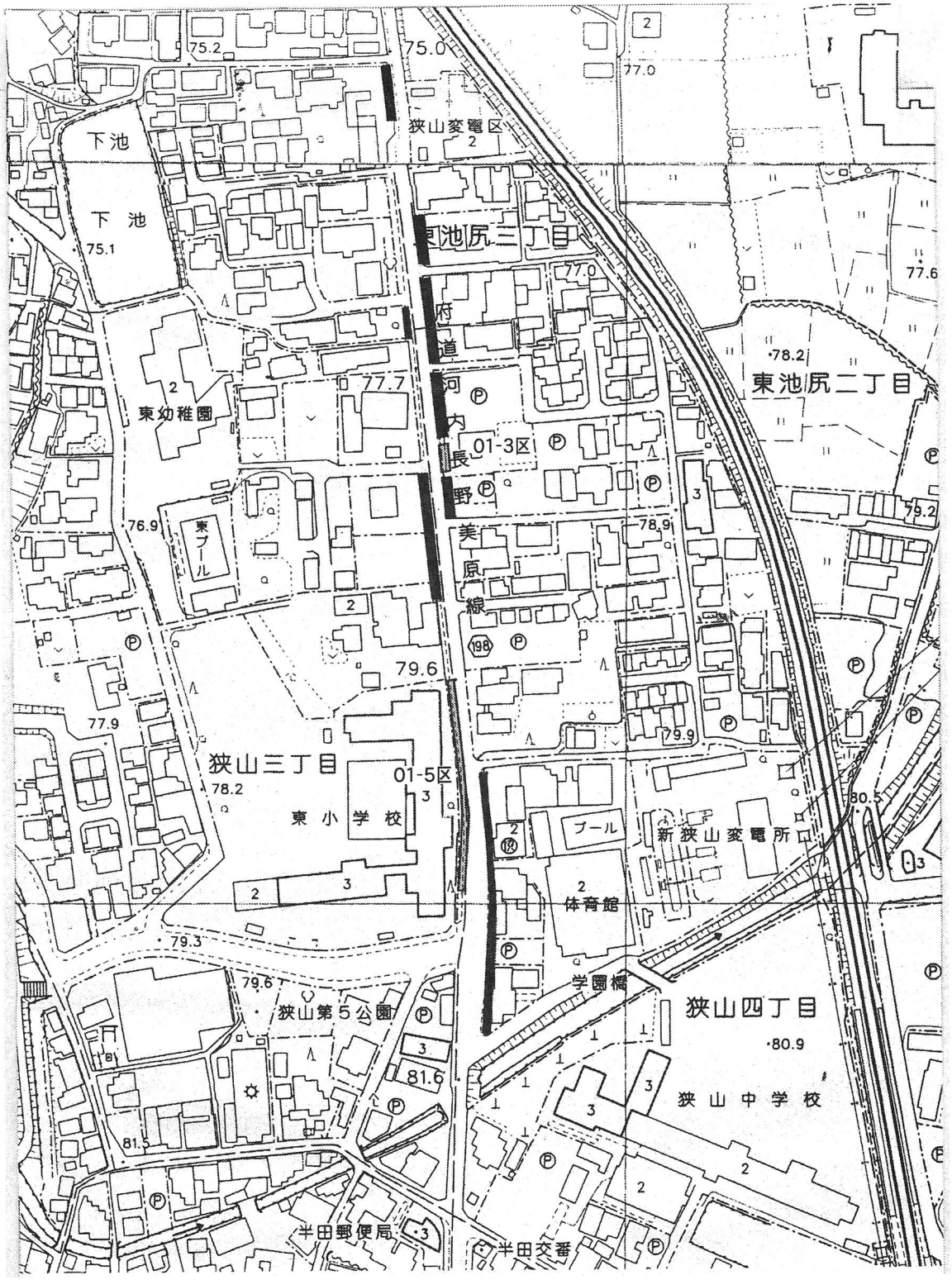


図３　調査区位置図（黒塗りは既存の調査箇所）

3. 狭山藩陣屋跡01−3区

（遺構）

01-3区は狭山藩陣屋の旧御殿の場所からわずかに南に下がった場所、大手筋東側に沿った箇所に所在する。敷設される歩道の規模にあわせ、南北1.5m、東西20mの調査区を設定し、発掘調査を実施した。調査開始以前には調査区の西端にはかつての大手筋（現在の河内長野美原線）にそって、小石を組み合わせた野づら積みの石垣が存在した。この石垣は高さ80cm程度の低いもので、大手筋のレベルより30cm程度高い宅地の盛土擁壁の役割を果たすとともに、大手筋の両側の側溝の側面の機能も担っていた。数年前までは府道の両側に同様の形態の石組が何箇所か残存していたが、現在では本調査区の東側に残るものだけが唯一のものとなっている。またこの石垣から80cmほど東側には一列にカイヅカイブキの植栽がなされていた。この植栽はそれぞれの木の間隔が時には1m未満という非常に密集したものであり、その生長、および根の除去の影響による遺構面の撹乱のため上面の遺構面における遺構の検出はできなかった。現在の地盤から40～60cmの厚さをもつ腐葉土を除去したところで第1遺構面を検出したが、このような事情のため第1遺構面における遺構は先に述べた石垣のみであった。

石垣は10cmから20cm程度の径の石を組み合わせたものであるが、石は丸い自然石で上の石が下に並んだ石の間に入るように並べられているが、それほど整然とした形態ではない。角度は垂直方向から5～10度ほど東側に傾斜している。裏込の石、砂利などはまったくみられない。断面を観察したところこの石垣は第1遺構面を構成する明黄褐色土を掘り込み、背後に暗褐色土を入れながら少しづつ積み上げたものと思われる。また石垣の底部はほぼ第2遺構面と同レベルであり、石垣は第1面の時期にはじめて構築されたものであることも確認できた。第2面の時期にこの石垣に先行する何らかの施設が存在したかいなかは今回の調査では確認できなかった。

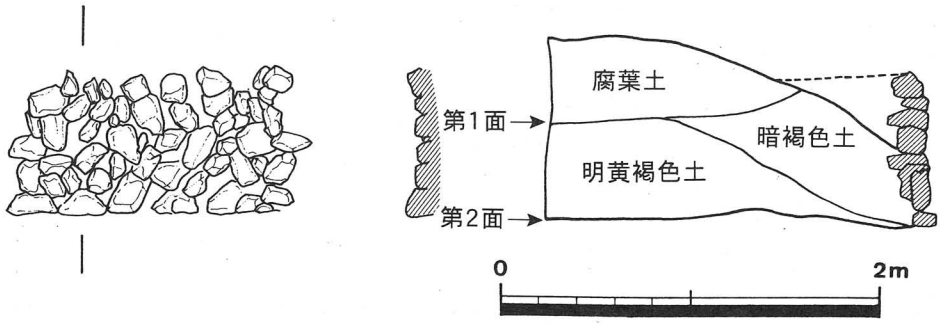


図4　狭山藩陣屋跡01−3区　第1面石垣立面図・土層断面図（S=1/40）

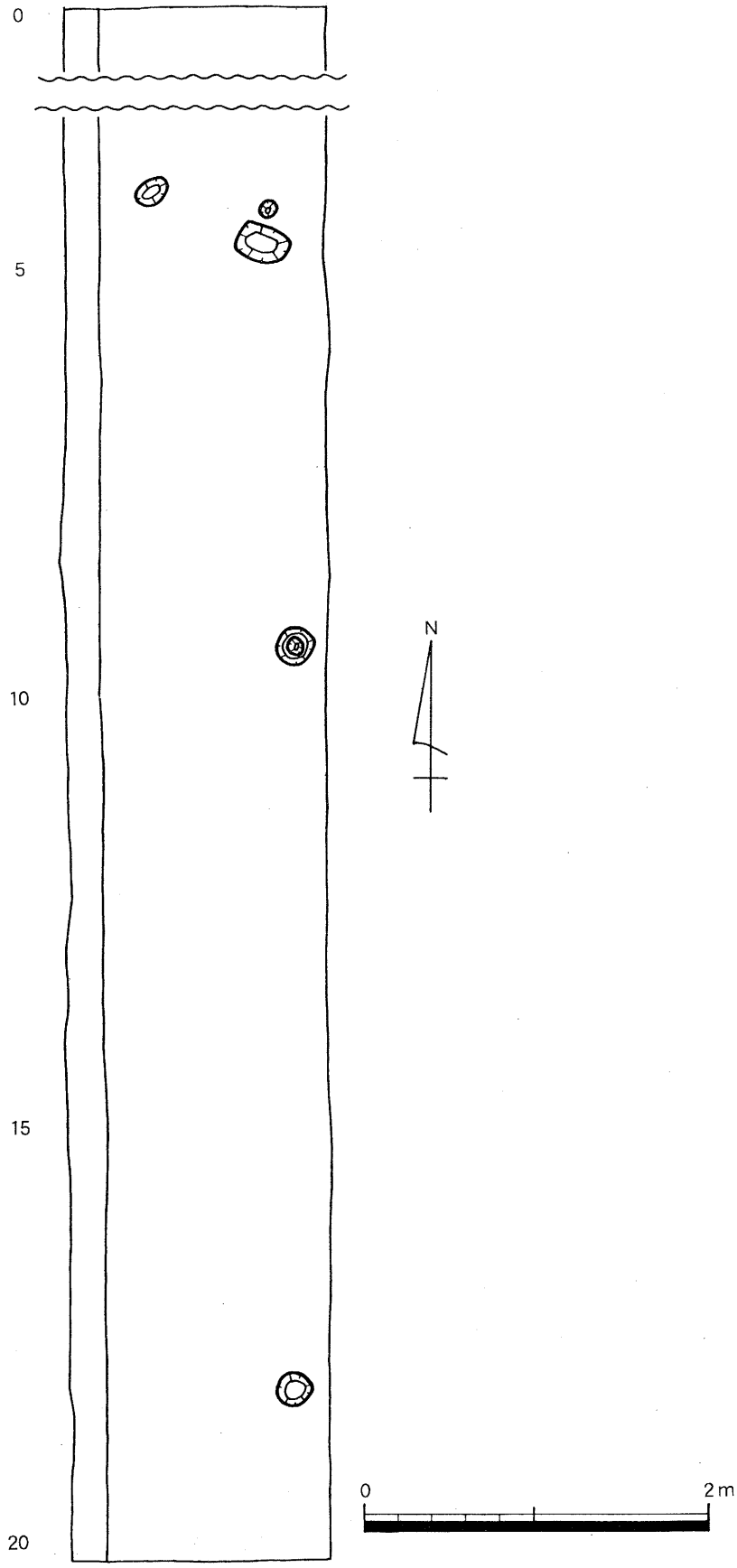


図5　狭山藩陣屋跡01－3区　第2面平面図（S＝1／40）

第1遺構面から40cm掘削したところ、黄茶色シルトによって構成される第2遺構面を検出した。

この面において遺構の精査につとめたところ、５個のピットを検出した。うち３個は調査区西端に沿って南北方向に直線的に並んでいる。大手筋に面した塀などの遺構ではないかと考えられる。

本調査区の南北の隣接地は平成11年度にすでに発掘調査がおこなわれているが、その結果、北側の99－5区（G区）では埋甕遺構、などのほか、南北方向に並ぶ多くのピットを検出している。また南側の99－5区（H区）でも非常に多くのピット群を検出しているが、その間にはさまれた本調査区における遺構の密度はきわめて低いものといえる。

また01－3区では包含層中より染付の破片などが若干出土しているが、実測可能な遺物はなかった。

4. 狭山藩陣屋跡01-5区

（遺構）

01－5区の北端は01－3区南端から約80m南側に所在する。大手筋の西側に接する調査区である。この調査区の長さ（南北方向）は80mと非常に長い。また幅（東西方向）は歩道工事の範囲に合わせて2.5ｍであるが、調査区の東半分には既存の道路側溝が設けられており、遺構は完全に失われていた。また調査区の西側には小学校のコンクリート製の塀の基礎が設けられていたため、その影響で地下の遺構も大きく撹乱されていた。調査区自体も完全な直線ではなく、道路側溝や学校の壁もやや屈曲する箇所があるため、地下の撹乱の状況も場所によって異なり、調査区内でも東西方向の全体が撹乱を受けている箇所が所々にみられた。したがって全幅の一部でも調査が可能であったのは、総長82.5mのうち図６に示した16mと図7に示した28mの計44m分であった。図６・７のそれぞれ左側に記した数字は調査区北端からの距離を示している。

図６の北端から５m～13mの箇所においては拳大の石を２段程度ならべた石組遺構がみられた。

これは先に述べた01－3区でもみられた道路側溝の壁と屋敷地の擁壁を兼ねた石垣の一部と考えられる。おそらくは現在の府道の側溝を設けるとき、旧来から存在した石垣をそのままコンクリートの型枠として使用し、道側（東側）にコンクリートを打ったものであろう。したがって今回検出したのはこの石垣の盛り土側の部分、いわば石垣の裏側部分にあたる。石垣は１段あるいは２段分しか残存していなかったが、もちろん本来はさらに上まで積まれていたものであろう。また北端から16.5mの箇所においては東西方向の溝を検出した。これは幅50cm，深さ25cm、調査区内での長さは90cmの溝で、底面は東側にやや傾斜する。この溝の箇所の大手筋をはさんだ向い側（東側）には東西方向の道があるのでこの道も大手筋から西側に入る道路の側溝か、あるいは屋敷境の溝であると思われる。また調査区北端から33ｍの地点より北側は他の面より30cmの深さに掘り込まれて段状になっているが、この土壙１の内部に土壙３個と南北方向の溝がみられた。土壙１は調査区内において長さ520cm、幅60cm、深さ15cmである。内部には直径10cmから15cmほどの石が多くみられたので、先に述べた石垣と同様のものの痕跡であると考えられる。また土壙１の埋土中からは水滴などの遺物が多く出土しているので投棄用の穴の可能性もある。この調査地北端から33mの箇

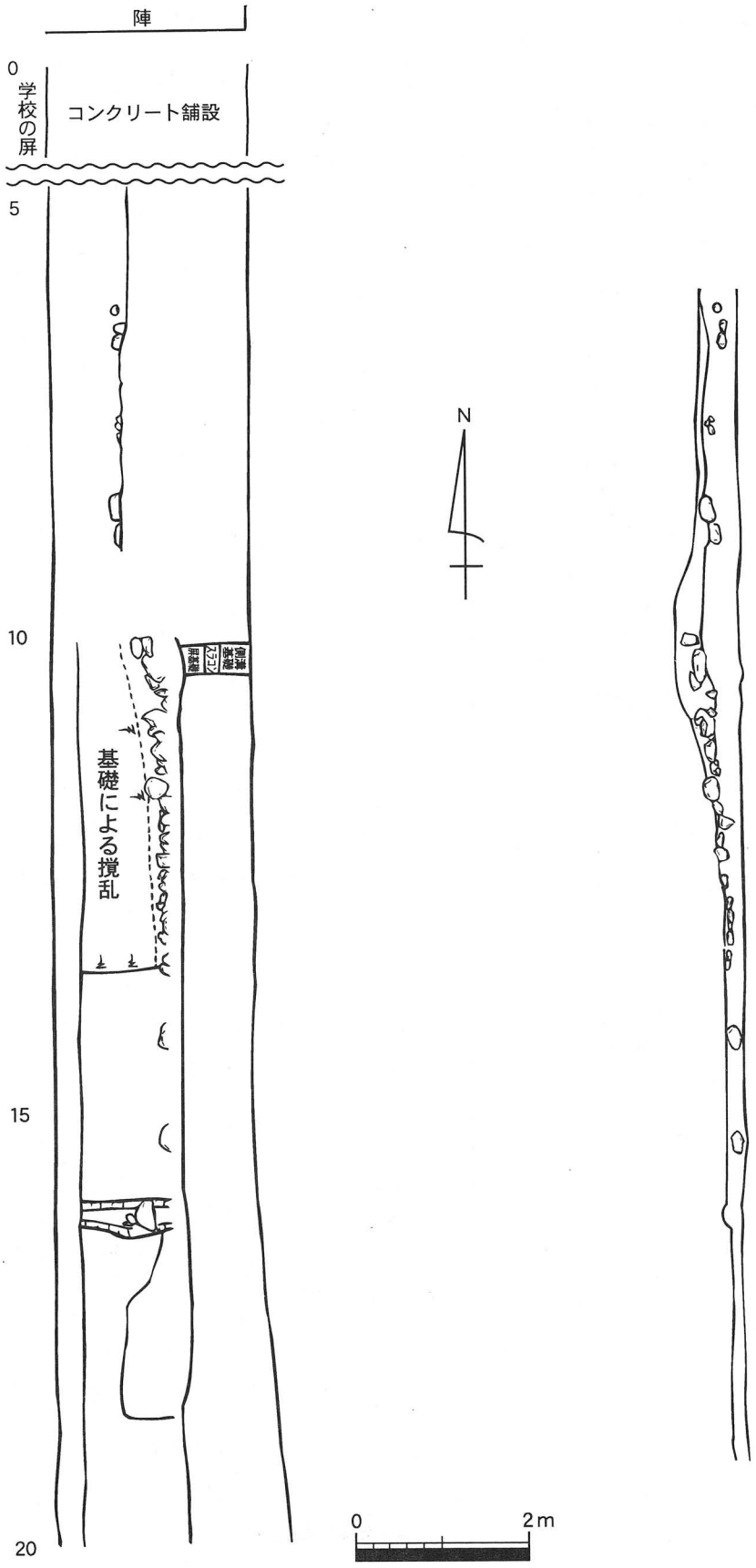


図６　狭山藩陣屋跡 01－5 区　遺構平面図 (1)（S＝1／80）

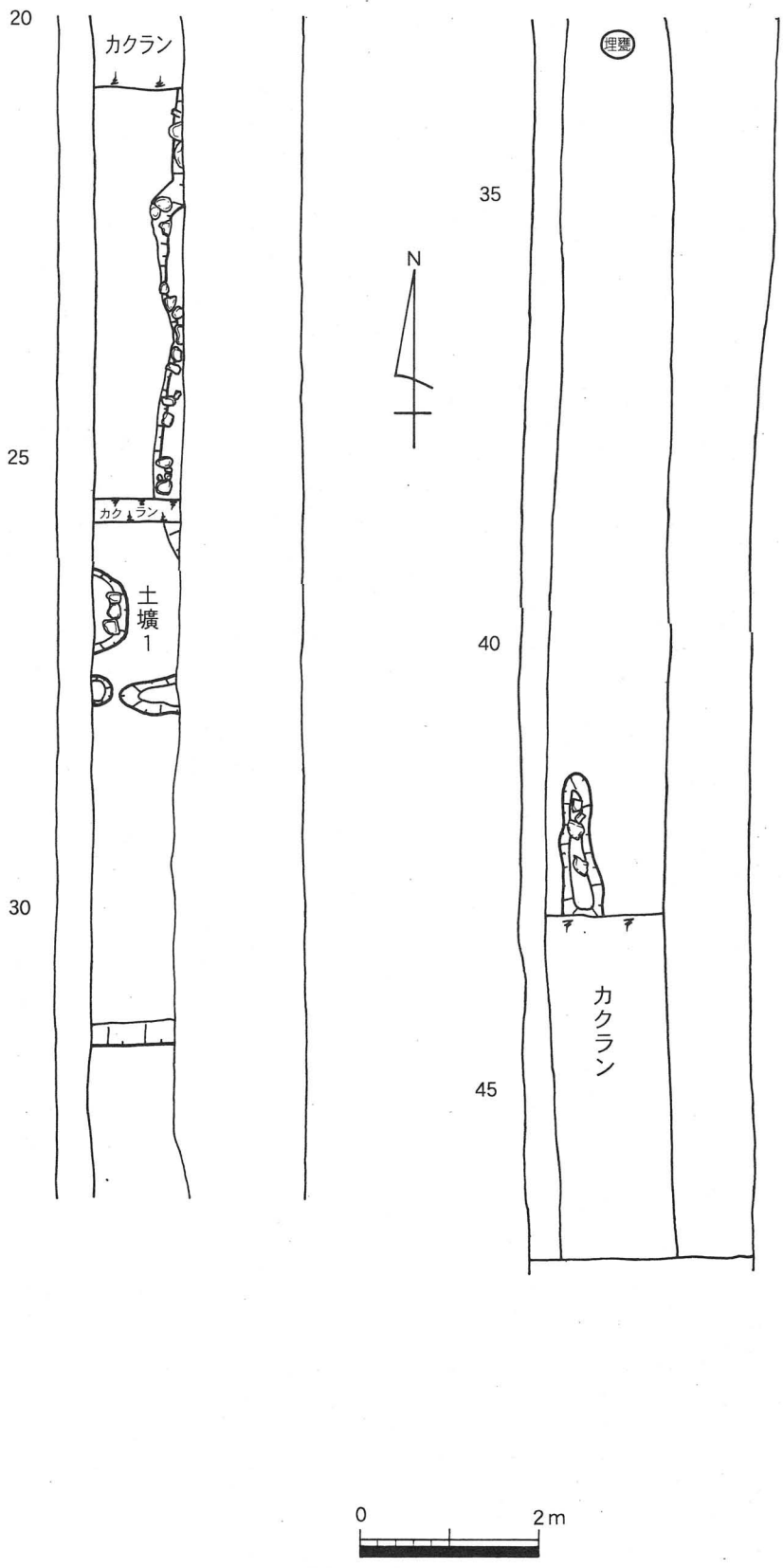


図７　狭山藩陣屋跡 01－5 区　遺構平面図（S＝1／80）

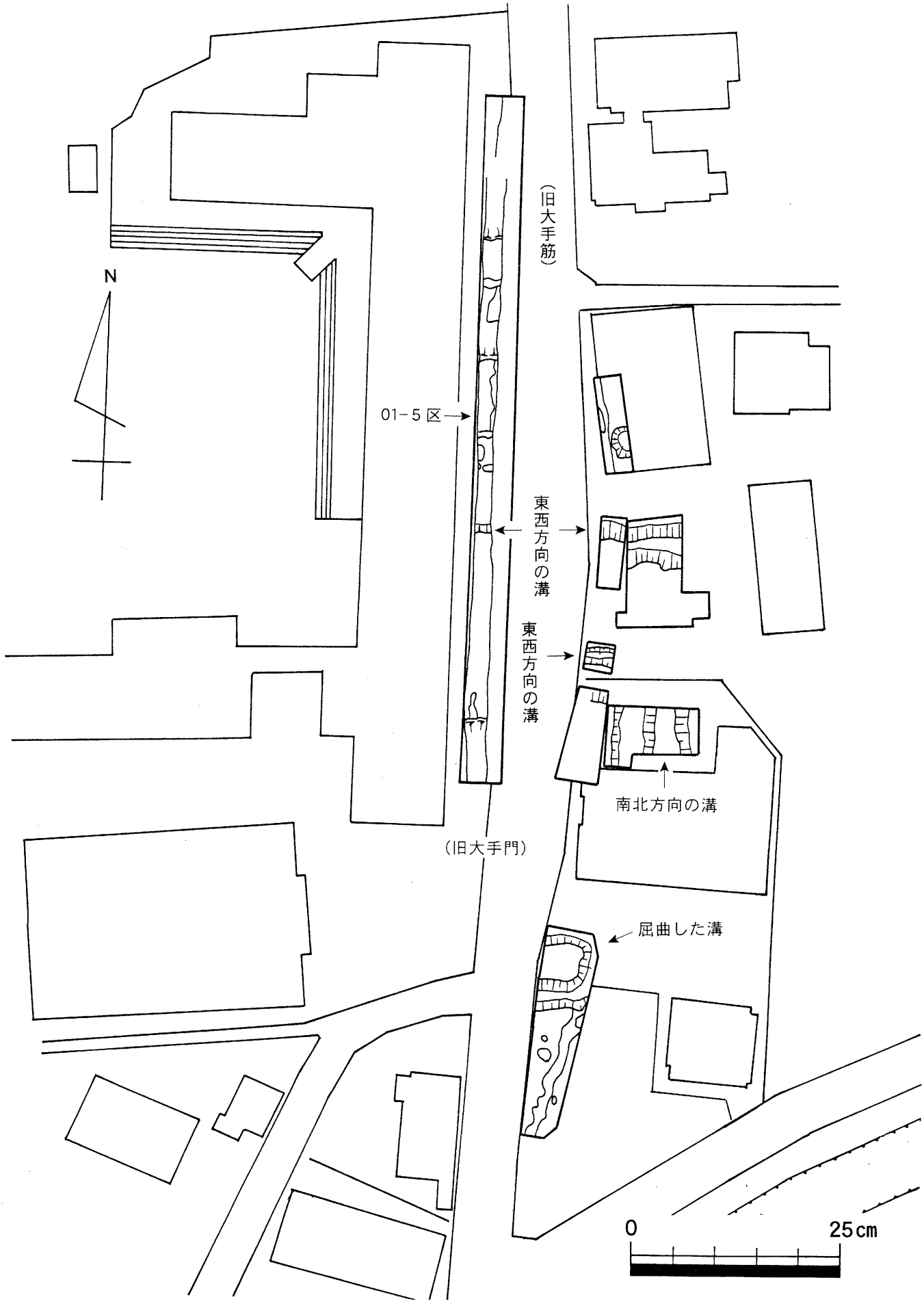


図８　狭山藩陣屋跡 01－5区　周辺の遺構（S＝1／500）

図９「狭山藩陣屋上屋敷絵図」に描かれた上屋敷南端部の防御施設

所にある段の場所と道路をはさんで東側の位置では平成９年度の調査においてやはり同様の段が検出されており、狭山藩陣屋上屋敷の南側を画する施設にともなう遺構であると思われる。上屋敷の南端部には大手門のほかに溝や障壁などの防御施設が大手筋と垂直方向（東西方向）に設けられていたことが近世末期の状況を伝える「狭山藩陣屋上屋敷絵図」などに描かれている(図８・９参照)。

また調査地北端から３４ｍの地点においては埋甕遺構がみられた。甕の上部は破損して口縁部も周辺で検出できなかっったので、おそらく埋甕が検出された箇所の周辺では遺構面自体が後世に削平されているものと思われる。この埋甕遺構より南側においては、歩道側溝、学校の壁などによる遺構面への影響が大きいこともあって顕著な遺構は検出できなかった。

（遺物）

実測が可能であった遺物は図１０・１１に掲載した通りである。このうち図11の埋甕以外はすべて土壙１より出土したものである。個々の遺物の詳細は表１に示す通りであるが、ここでは特色のあるもののみを取り上げることとする。13は形状から焼塩壺と思われるが、底面中央に焼成以前にあけられた直径６㎜の小さな穴がある。その用途については検討の余地があるかもしれない。17は

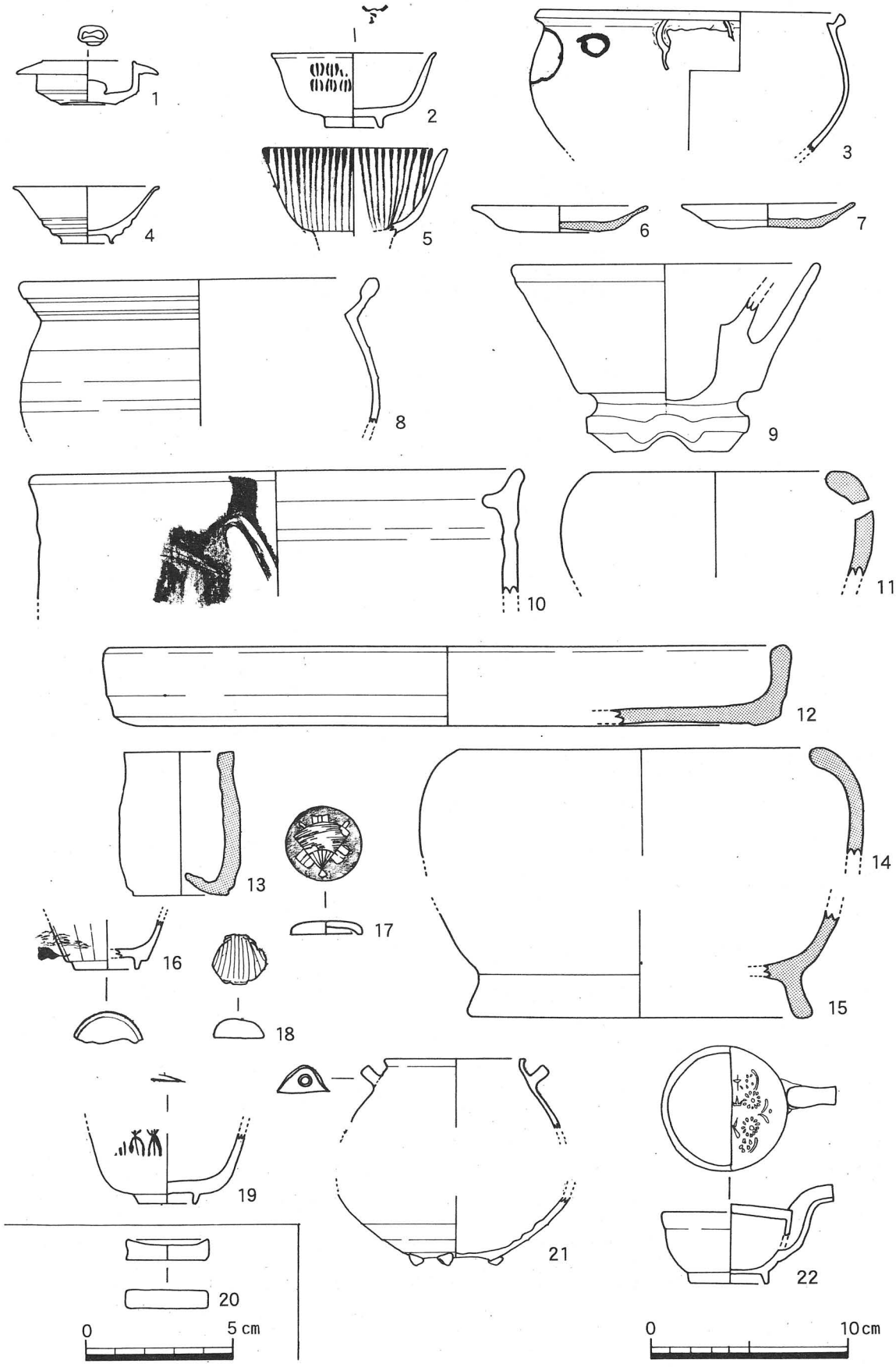


図10　狭山藩陣屋跡 01－5 区　出土遺物 (1)

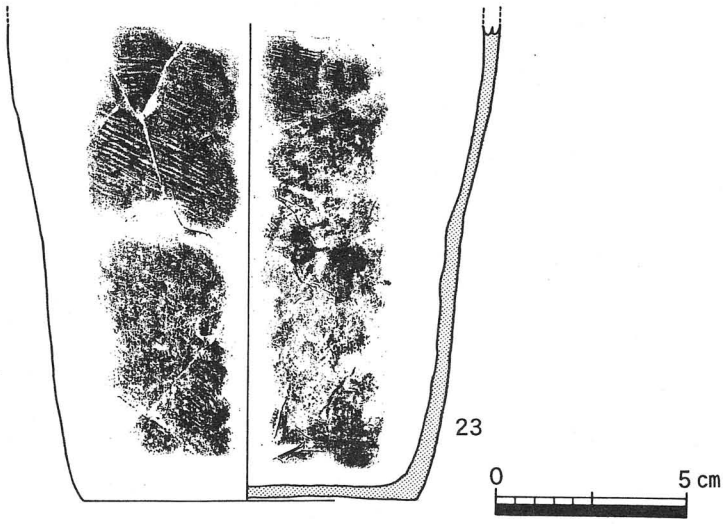


図11　狭山藩陣屋跡 01－5 区　出土遺物 (2)

磁器で表面に朱色の彩色をほどこしたものである。小さな円盤状の形状であるが、外周部が下方に垂れ下がっており蓋として使用されたものであろう。身は未検出であるが、その大きさから考え紅猪口などとして使われた物と思われる。18もまた小さな土製品である。底面は扁平に作られているが、表面は二枚貝の文様がレリーフ状に彫られている。円盤状の形状ではないので泥面子としての使用は考えにくく土人形の一種と思われる。20は白磁で円盤状の形状を呈している。現在のところその器種は不明である。

全体的に肥前系の磁器が多く、土製品などもみられる。大半は衣食住に関わる生活雑器であるが、22の水滴など武士としての生活の一端を窺わせるものもみられる。時期的には近世後期のものが中心を占めている。

5. まとめ

平成13年度の調査も歩道の設置工事にともなうものであったため、大半は幅2m程度の細長い調査区を設定しての調査であった。01－3区においては第１面で現存する石垣を調査し、それが近世後期に設置されたものであることを確認した。また01－5区は狭山藩陣屋の南端に所在する調査区であり、陣屋の南端を区画する溝（土壙）の一部を検出することができた。

図面番号	遺構面	器　種	産　地	口径	器高	施釉・文様	その他
1	土杭1中	陶器・土瓶蓋		4.6	2.2	灰色釉	
2	土杭1中	磁器・小碗	備前系	8.4	3.8	透明釉　外.見込み染付	高台径3
3	土杭1中	陶器・行平	瀬戸美濃系	15.6	7.1	緑釉	
4	土杭1中	磁器・小杯	備前系	7.4	2.9	透明釉	
5	土杭1中	磁器・中碗	備前系	9.4	4.5	透明釉　染付市松縦線文	
6	土杭1中	土師・灯明皿		9	1.3	透明釉	
7	土杭1中	土師・灯明皿		8.8	1.2	透明釉	
8	土杭1中	土器・小甕	丹波系	16.4	7.4	茶色釉	
9	土杭1中	磁器用途不明	備前系	15.6	9.6	赤茶色釉	高台径5.9
10	土杭1中	陶器・水鉢	瀬戸美濃系	24.8	6.3	透明釉・緑釉流水文	
11	土杭1中	土器・火鉢		13	5.4		
12	土杭1中	土器・焙烙		34.4	4.1		
13	土杭1中	土器・焼塩壺		5.6	7.3		底径4.8 底部4ミリ穴
14	土杭1中	土器・火鉢		19	5.5		
15	土杭1中	土器・不明		17.2	5.5		
16	土杭1中	磁器・小杯	備前系		2.5	透明釉　染付波	
17	土杭1中	磁器・蓋	備前系		0.7	透明釉　朱色絵付扇子	
18	土杭1中	土器・ミニチュア貝					幅2.9
19	土杭1中	磁器・小碗	備前系	8	3.6	透明釉　外面・見込み染付	高台径3
20	土杭1中	磁器・用途不明	備前系		0.6	透明釉	長さ2.8
21	土杭1中	陶器・行平	瀬戸美濃系	7.2	4.6	灰色釉	高台径3.4 底部三足
22	土杭1中	陶器・小水注	京焼系		4.2	灰色釉　菊水	半月口形
23	埋甕	土器・甕	堺湊焼		38		高台径26.5

報告書抄録

ふりがな	ふどうかわちながのみはらせんほどうこうじにともなうさやまはんじんやあとはっくつちょうさがいようほうこくしょⅢ
しょめい	府道河内長野美原線歩道工事にともなう狭山藩陣屋跡発掘調査概要報告書Ⅲ
シリーズ名	大阪狭山市文化財報告書
シリーズ番号	24
編著署名	市川秀之
編集機関	大阪狭山市教育委員会
所在地	〒589-0005 大阪府大阪狭山市狭山一丁目2384-1
発行年月日	2002年3月31日

ふりがな 所蔵遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査区	調査期間	調査面積(㎡)
さやまはんじんやあと 狭山藩陣屋跡	おおさかふおおさかさやましさやま 大阪府 大阪狭山市狭山	27231		34°30′15″	135°33′30″	01-3区	200105から200106	40
						01-5区	200201から200202	160

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物
狭山藩陣屋跡	城館跡	江戸時代	01-3区：石垣・柱穴 01-5区：石列・土壙・埋甕遺構	01-3区：なし 01-5区：土師質甕・土師皿・磁器茶碗・磁器水滴・土製品具

写　真　図　版

a. 調査以前

b. 樹木除去後（東から）

c. 樹木除去後（南から）

a. 石垣断面

b. 第2面（北から）

c. 第2面（南から）

a. 調査区周辺
（南上空から）

b. 調査以前

c. 石組出土状況

a. 土壙1
（南から）

b. 土壙1石組

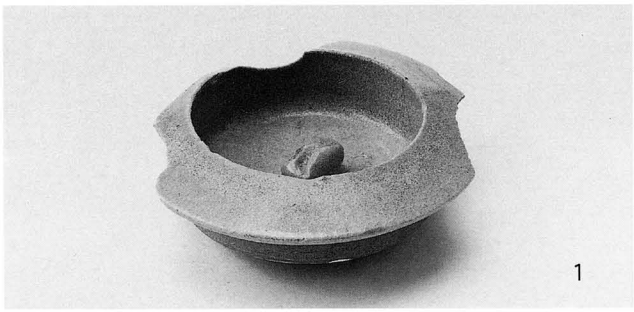
c. 土壙1底面

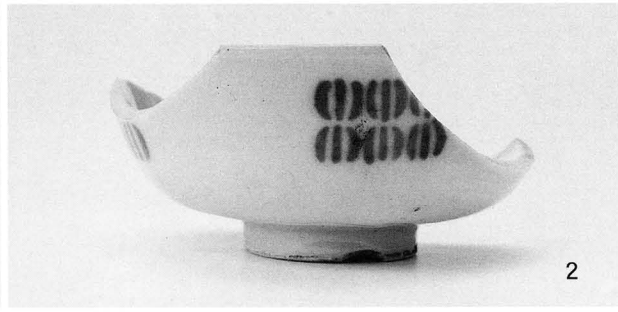
図版5　狭山藩陣屋跡01－5区

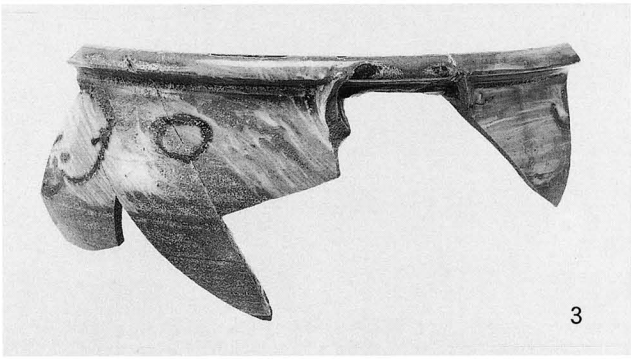
a. 埋甕

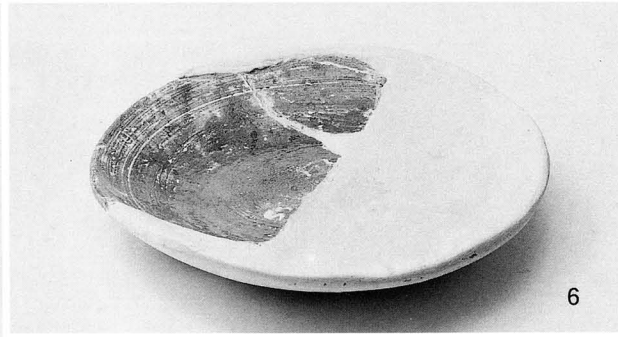
b. 埋甕（直上）

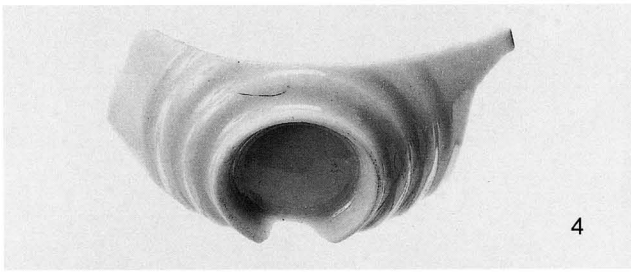
c. 埋甕（除去後）

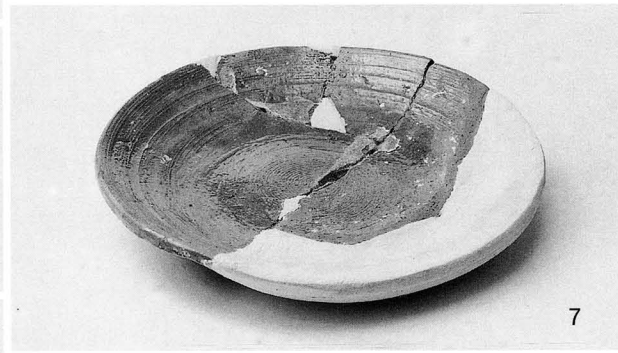

1

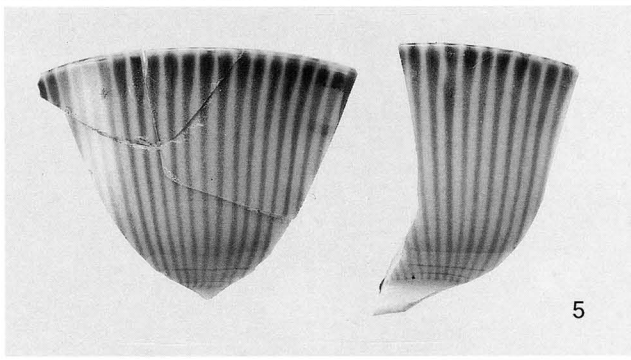

2


3

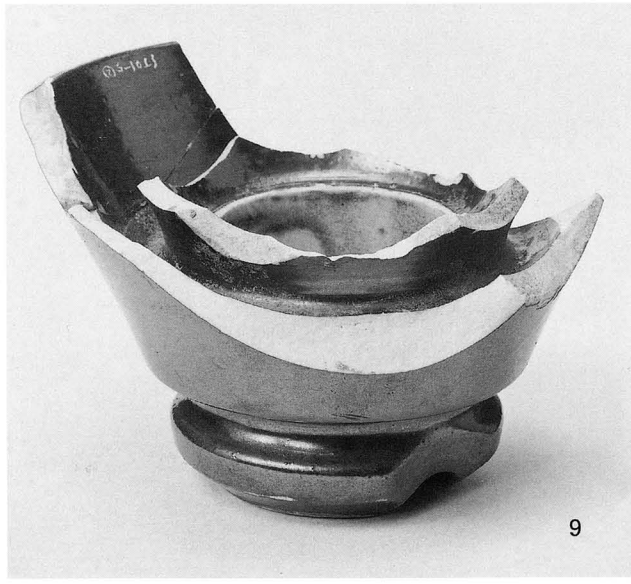

6

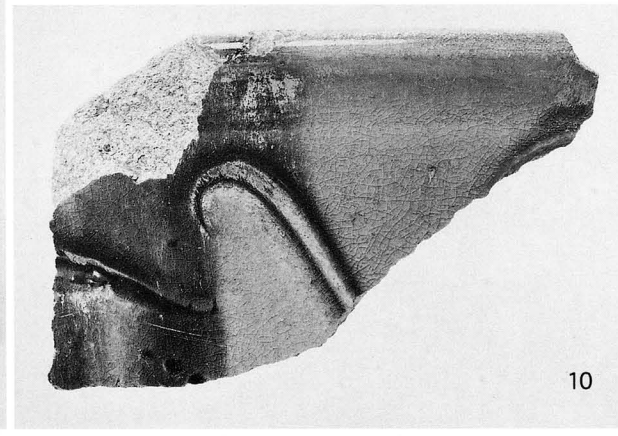

4

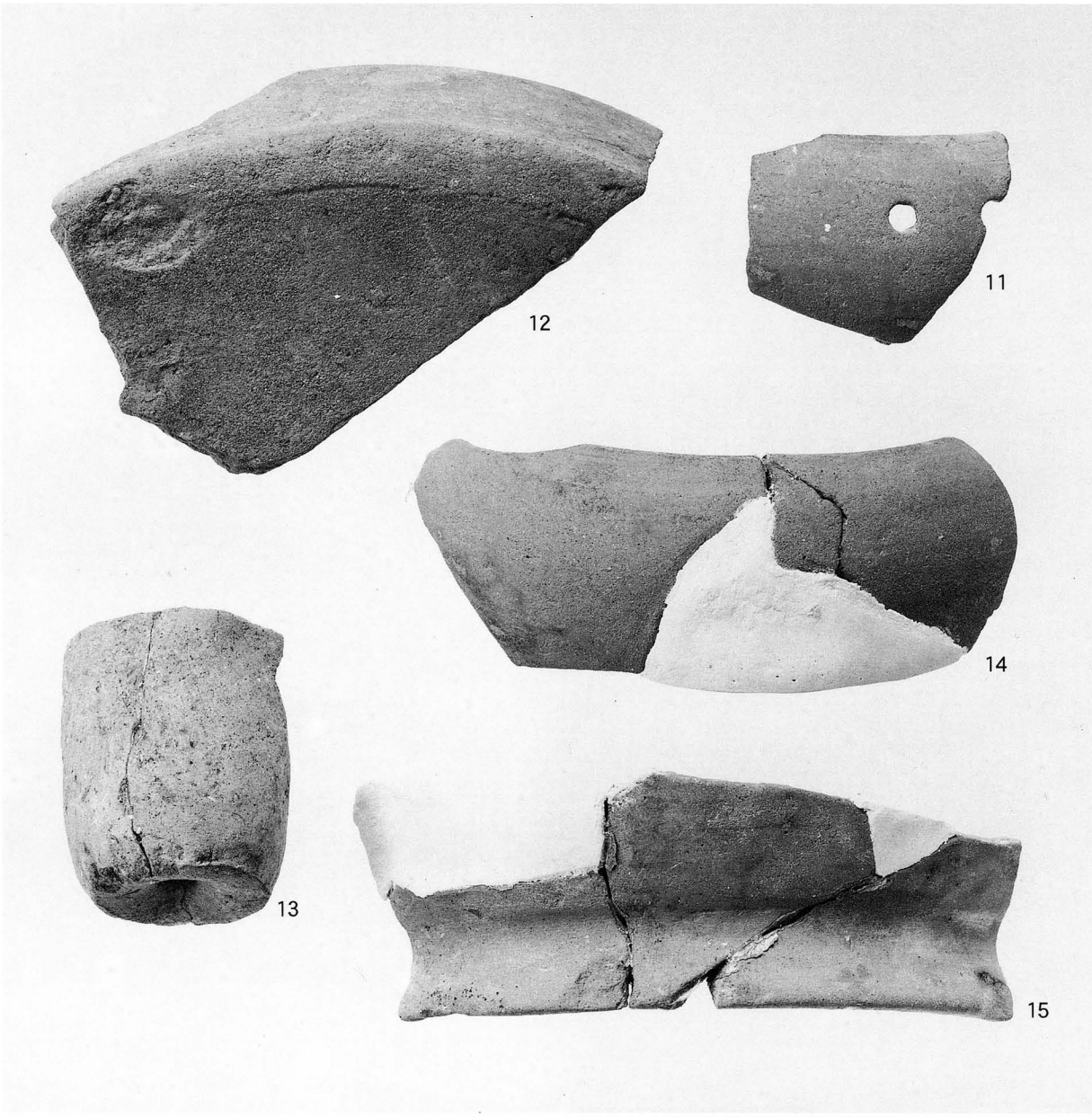

7

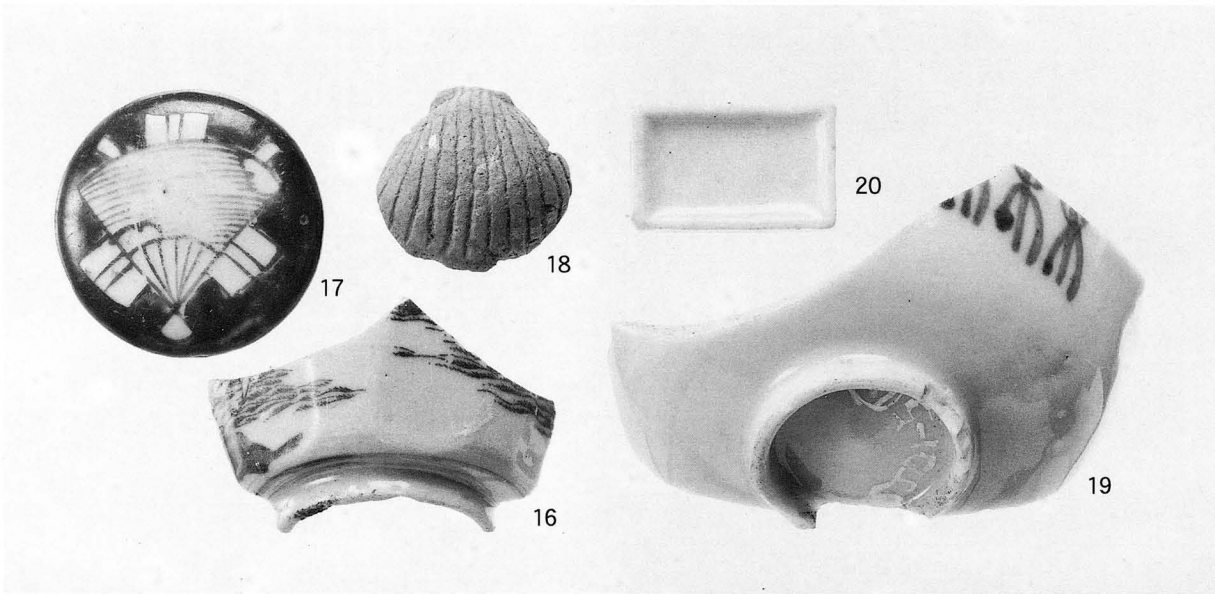

5

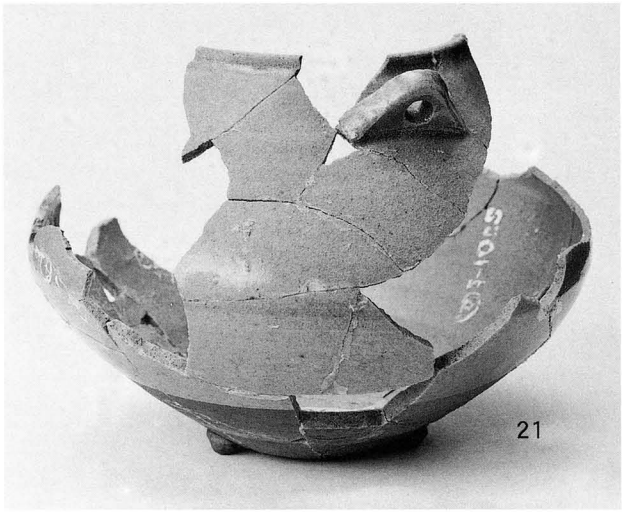
8


9


10


12
11
14
13
15


17
18
20
16
19


21

22

23

大阪狭山市文化財報告書24

府道河内長野美原線歩道工事にともなう
狭山藩陣屋跡発掘調査概要報告書Ⅲ

発行日　平成14年(2002)3月31日
発　行　大阪狭山市教育委員会
印　刷　ヒ ロ シ マ 企 画